丹鶴叢書

草根集 六

117
105
2

東京圖書館
和書門 叢書類
別 函 二 架 二 號 一〇五 册

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

東京帝國大學圖書館藏

草根集第六

次第不同

戀部

故柳原芳梦納本

柳原家蔵

初恋

なさ初るはつこひの三月いつもさくらもつめしかはの烟えん

つゝめこそ花の雲ゝ霞ゝよんのそもたるもの

かゝるこゝろいとやもの初ゝ枝ゝつもるゝ雪もぬるゝを

ぬるゝむいろともたゝ江の一むゝ衣たるゝ袖ゝ

たゝもつゝめ恋ゝ袖の末ゝむゝ吳一見しそゝるゝ

たゝるゝゝ恋をもたゝるゝ人ゝ出ゝ見ゝ袖

袖のゝ行ゝ水の流ゝ袖ゝ袖ゝ袖ゝ

桜ゝ小初ゝ花のゝ袖ゝ袖ゝ袖ゝ袖の袖ゝ袖ゝ

[illegible]

逢恋

[illegible]

経年恋

[illegible]

待恋

[illegible]

[illegible]

別恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

忍歎
見恋

[illegible]

適来帰恋

[illegible]

隠名恋

[illegible]

隔河恋

[illegible]

閑居恋

[illegible]

卜恋

[illegible]

尋恋

[illegible]

悔恋

[illegible]

深更帰恋

[illegible]

帰無書恋

[illegible]

隠在所恋

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

老後初恋　をまとてうたてもゆるく玉章ちとはすゝまもゝ

幼　恋　よとあさん契こまてかるさきゝ絵角のをのゝ心を

洩初恋　をほれあまとやをもの沙とうつもくそをのゝ仮をん

契あれや思へをこゝ初うゝ今ちてのをみつまふかゝぬる

角　恋　流くの名をそるくゝも我へうつをゝ（ふゝめそ類一本）のゝ下ゝ

立角恋　樗の実のうゝ花を飛のをゝ名をゝ（め）中川の宿

契　恋　さうとゝ契をかゝくゝ杉のたゝ浦のむまの白ふゝ

契あゝ契なりもゝ（楽ナシ）ゝ見ゝいゝ世のをゝ

世ゝのけゝ契ゝの秘を思ふ人のつゝに思や果ま

ゝるもくゝゝ世ゝの年のまの秋ゝ世

久契恋　我をゝ立ゝ人もゝきゝのをの玉ぬをのふ

契言恋　らまゝ思ゝうのゝのをかるいのをゝ思ゆら

初逢恋　命をも名をもゝさ八杉果ゝ杉ぬゝの多の契ふ

稀　恋　小袖衣うかゝまゝ（う類）みをゝきゝ中にある契ゝな

毎夕待恋　風ゝゝ我ゝゝの宿の杉ふゝんのゝをかゝふゝ母

後朝恋　みゝきのふゝをゝるまを待ふゝと我の涙の袖ゝ消めや（ぬる類）

かゝるゝのゝ原初雪の思ぬゝもけぬる思ゝ

ゝのゝふゝゝゝ契ゝ八杉ゝとのゝむゝゝ思ゝ

ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝ八ゝゝゝゝゝゝゝゝ

題　恋　さゝ衣中の契のうゝを抱ふ馬のゝ正ゝを思ゝゝ恨る

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

[illegible]

遠恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜　恋

ぬるよるもさこそのかのいちたゝかのもとあはぬまをさうらん

契待恋

たゝしもとゝ思ひ侍のそまふこゝはあはぬをなげくこゝろも

おくれぬのしゝ侍そこゝはあんとひしゝもるゝ宿の松風

稀逢恋

かゝるとしもちきりのほかあひすてはとゝふ人ゝそこゝ

石とふるさはをたとるとし人乃ちゝ侍のおくの中道

詞和不逢恋

我ゝそもゝたのめしゝ人のそのたゝふこゝやうゝの松のこゝをと

思ふなのゝくに侍るそのたゝ尚すむそよのふるゝ

剔不逢恋

ゆるゝそもる玉藻のそふもちらをとうこの浦の乱と

号寄ふこゝ人の玉髪とまれのけふゝまる松れあ

つまはさかゝゝぬるふなむこゝ人ゝれふゝれの本枝の風

ものつはの人ゝ和ゝふゝ見ふ人のいろやんゝもむ

恨不逢恋

ゝ取ゝもゝこゝいのふるゝ見ふあふめ風の音ふさゝるん

祈　恋

ちゝの女神男神のちるまゝゝゝをゝ祈やうほ

仏なゝ人やゝゝゝいるゝふ見ふやゝろ人ゝまたゝの

神もうけ仏人も玉なゝ武ゝしゝゝみふやるゝふゝるゝん

思ひ祈の枕のちゝふゝれゝゝあゝをゝゝふ神ゝふん

仏の世をゝ行ふなゝゝ月まゝと人ゝよゝいむゝゝゝ人ゝるのゝ

神氏の神ふのゝゝゝむゝのゝふつまゝ和人のんゝもゝえよ

ゝゝゝ

恨恋

あまのゐる海士の苫屋もいとせんかなきかの
こゝろをくみつゝのおもてもてこそ恋ぬれ
男の恋のもさいやかさあるんかなるこゝろ
ゐ蔦ふかのうゝ家やとゝぬ秋の恋ぶんつゝ
かなしかりゝ秋とあ一つのもさ浦ゝあるこゝろ
夕ゝ鳥毛のゝふあれまゝ恋ゝ伝ゝこゝろの浦波
かちをゝえむゝ風もゝやゝゐゝ毎ゝ恋ゝ
恋の伝里のもゝるゝやゝゐゝたゝまゝ八ゝ恋ゝむ
ゝゐ中八秋のまゝゐの同一枝ゝ及ゝゐゝ蔦の下風
ゝかゝよゝゐゝしゝぬゝよゝのゝゝゝゝ恋ゝ八ゝゝゝの男ゝゝ一本
まゝさゝゐゝ男ゝゝゝゐゝたゝゝゝみゝゐゝ舟ゝゐゝこゝ

（と奚一本）

恨偽恋

思ひくさ古のもとゝ人ぶさもあるぬゝ伝ゝ恋ゝ
たゝ秋ゝ社の原の玉ゝたゝこゝかゝゐゝ恋ゝ
ゝ

恨身恋

こゝかゝる恨ゝ恋ゝもゝ人ゝ
秋ゝ伝の秋ゝ人ゝ下ゝ恋ゝゝゝ人ゝ恋ゝ
ゝもゝこゝゝやゝゐゝ恋ゝ伝ゝ恋ゝ人ゝ恋ゝ
世のゝゝゝ人ゝゝゝ恋ゝ人ゝ恋ゝ

絶恋

ゝ別ゝ昔ゝゝゝ中ゝ恋ゝ人ゝ
ゝゝ中八ゝ別ゝゝゝ恋ゝ人ゝ
社ぬゝゝゝ恋ゝ思ひなゝ恋ゝ人ゝ
水ゝゐゝ人ゝ恋ゝ伝ゝ恋ゝ人ゝ

（子美）

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

忘

丞　人をもるやまの月のさやかにもみぬ秋のくるまを
みてもあかぬ夕ぐれやあるぬぬ世るまてハ人まおもかもるる（ミ一本）
ちかしとも思ひ捨しかとの（十一本）ものとをたにとも出ぬ夕くれく
捨しかをきあはきく物をもるきの秋くハ
まかくるあのあをもあのあをもれ忘ぬ落ハをの秋てのみ

久

丞　ちをふくりをもおもるれのををみを新（と一本）意あををて
かをもをを思ひ初ゆ（ゆ一本）ゆををををいつの春をををを孫と
をを中ハめをしをのををを（を一本）思ひをゆ出ぬ夕をを
春

丞　月をみ思ひをりとやををを（ハ一本）ををををををををををを
をををををををををを

冬恋

待夜ぬ袖に宿る月のあるかなきかの人のいそぬ夜の夢の
幣名ん我くつ〻ぬ袖ちつの実の下葉なりしこぬる
ちとをこそあの〻うつあもをあれあまぬるも忘れ庵の嵐ふ
深川社の杉の関ちそくちるひあるまさのもの
ほ〻ほ〻ほんのとうをんつるこ人こちこ人ちこ人
風ちのぬくつのむ〻おほ山社あるもつむるやちまし
うに井をみ〻に立るさまふいつ人ちきやつとて逢ぬん
見ちうんつるもる妻こめまこ社をこそ石のやへうき
うちこんてきこきちつの名ふあるこ人まあこ信〻
はまよ見つ見へいるよるこ深ちこ社まるせく

逢不逢恋

ちりつる玉こ八深ち社よる分ちも人を行やへこて受
こかこをみあよ坂の幣をもいさちこ川の実のあ花風
ちもりこと秋ふこや行年人拾ひしまの名ちの松
こそこれみ〻その年の月の求めこちこ社こを衣拾ん
こちなるこやゆめこあをこいさ引こかここのち〻沈こ
お坂をちこ〻実ちこ〻たち玉ちさの名をことめん
きめ〻の空の月こ求めこちこぬるこのはるもむ

増思恋

かきやこむこつの下深分なこのあ乃大和このこ

逐日増恋

庵ここく深分をこる年の日こ社因の浦のここふ

依忍増恋

見ひりこちこ水のやこ清ぬこれこのさこはこるこ

境外恋

ちぬくよりゆん扇と宿の秋その日なるぬるなりとも

聞声忍恋

宿とくはやてやつる扇のまに秋も秋せてそそやそそふ

人のそそ見まうをかくこそ八耳のそそやなしてそそん

忍親眤恋

秋なるぬ世の秋のかくこそ寝もつなる秋よも分

後朝見書恋

あさそそ枕のトのかくそそふも清る鳥の泣かし

不逢恋

分をとくこそこをあこそ世よそそるくまあこそ

小奚

逢をさもいのちはあるを掛よかんをとくやつ世をき

恋ふ世をきかくを枕うの泣よそたを表ともそ

今よも泣ようあなてあこそくそれむ袖の石泣き

世なをを思いやもくさんつよ又恋拾つこ世のちの世

子拾

本意なるえるくにぬをこそ秋ケくこそ中の秋のそる

そを世をそふをふをこそをよ色もあの分のよそそこそ

世もそそそくもふをそを世こそなる時もふを色そそる

拾あをあをこそ拾分世をそ川思こもたくの袖のをを書

従門帰恋

おの世のみのそるもこそこそ萬のそ風

雨そくをを世をそをなをおもそそそ又ゆるん

海邉恋

よもをそそ泣ゆそもふ井をもぬをくを世こそ為るあそそ

等閑恋

我くをくもせこそ軍のをそそをにめそをあひてむ

来不留恋

をそをるつもをそをるををの源氏世をいおく宿の宵武のそる

拾ぬをを拾よくくも萬のそのかそる拾そをまの秋を世

片思　ちりつもるもみぢのうへのしらゆきのしたにもえなんこひしきものを

片恋　思ひいりたる人の舟のさおさしてやをとめのつぎ

思恋　ゆきかへりたちまちそでもぬるるかな人をまちぬる市人

近恋　つのなる類　つもるあふよりもこの内のまつ程ハ神まちかねぬるき

旅恋　かたみの袖もつらし人のよそのの衣ハ袖さへぬるる

恋　やまぶしの笠ぬる雨ぬるる夢をぬるるの庵の嵐ハ

恋　恋なんおもひ　秋の月まちいでてえるよりのかたらひ

恋　もも類　ぬるるくるしやかくんぬる袖の露乃ちきりに

恋　時の恋つるきかくみのうら風袖こそ月乃おきつ浦ら波

見手跡恋　なるるもの女たらんとハ思ふきのくるる業もあてふるぬふ

見形獣恋　桜さへ咲くぬるるよりおくやをのまつむ花のうらせ

纔見恋　かつるこぬるや孫らのみるあよも及ぬ浦のかたてしるき　や一本

偽　恋　うるもむくしるるもやゆのあるやるむくん年もむ

偽くさのうみえんハ一ちひのまてまてもいのうまるこん　もと類

身をもをしハしるつかなる偽もある世なるこんハ形やうらん

獣　恋　とまかくふくんハ年ちる中とちる秋ものやくんのうき世あるん

ゆるるもるといんの世こんこ文しるるふなーてそ人のまをさうり

変　恋
人傳　恋
被返書　恋
立名　恋
負　恋
欲忘　恋
歎無名　恋
絶年　恋
山家　恋
契後変　恋
絶別　恋

契久恋　小篠原のもとやさとさいそのこちさ枕もくちぬ契り

変契恋　くたるよくちもとせたもとをもんかるくのたの幸ハ

春忍恋　かよこんのおくのこちるをまをとうたむをのもをそ

夏顕恋　名よそるる神ろの稱こうさおちうさ川岸の夏のよのる

人の名もいてかくそん夏衣をのあくこうすき幸も

秋顕恋　名をりく人の幸(ん美)のあさを頼ハ行くこたのきをこの堤水

冬顕恋　をしもしこ一水原の幸さ人行おく宮の水の行の枝

絶後悔恋　かへるなのき玉のをそのをしも行くはさ人ゆり宮のよ風

絶不知恋　都鳥なろう人のあるをのをもこ人ぶきを幻もの生

憑人妻恋　多をうもったのこもるのこ越く白波の名を契まそのる

乱恋　乱をもこさしせぬるの人妻ふ〜夫のみをかるる面のふ

憑媒恋　神もちる宮をつくこ同〜世のゆるるの原のそ色

ゆうるもそふきふ神のをはをよ浦れよ中川のあ

名所恋　里の名も我多のるふ武蔵ふあさし蛍宮浦の川長

祈難逢恋　かつをよのの〜つるるんふ山あくふたちのそそき

秋(恨ヵ)恨恋　ちふ〜ふ神風ふ秋のあくいるの高ふをかるるらむ

不来恨恋　をを高宮も梢の秋のそるそ志んをれ松風そん

人傳恨恋　ふたのるのなるみの逢のふつふ弟をふ〜風のふ人をよ

たのあて松てぬふの涙の世をかふ〜法をふるをふ具

松をふ秋ふ松をのとを高のそふて〜そふ〜風ふのふ人

連夜待恋　小萩ふきつまとの秋のそぬ袖をしぼるまの露をふるえ

作立待恋　あやまちぬ人をいまさらたのみたるたのもしく

不堪待恋　いりもうひあさんにを夜の庵のこと恋やのつまて

待空恋　とまぬ秋のゆきいもねさせともくのうたてしたれ

顕涙恋　花なくぬ涙ぬるさのあやまちをみるまに人をあらめ

顕後悔恋　世の秋のくあさをとをしるさかる人にのもうしめ

かやうきをあるにはよりほの烟は出るものうし風

焼こそはくくゆせ思ひさのゆる事の袖ろるかや

秋厭恋　秋の秋のもきをかろ人り秋人枕なくこそのそし侍

互恨絶恋　つきの石の立を男廉のむひけよ秋てれ沙ぬこの葛原

子規

無隙恋　おもの又やさのみ多のまんつまふの人ちの秋の世

惜別恋　まてまし かくろこそ秋の袖をみるそ秋の石そ

篠ふるあさをいこそみせ清く今もむるさめの篠

衣類

秋切恋　立佳ぬ秋しくをつらものあふめ川を平てす

心中恨恋　ほよもる時あるけもしーきみてのの世の下根を

忍久恋　つくふさてくゆせ人の原の篠ふりさ

増恋　多のめて見つめの花さう恨のそる袖乃もるさめ

不見書恋　さのちなくそうあさ鳥の袖をさ人をぬ世恋の多とろらん

非心離恋　ぬきいや浦むせなるぬ袖るさ人うたたちの秋のおやさて妻

逢夢恋　多かるる夏也くうかあ人のうつるもに似ぬくるさた

待便恋　まつ人をたのむ江の遠ま山ふるめ雲
尋縁恋　延ち小舟ちぎ掘まとをとをみやをるの江よ川ぞ
適逢恋　ゝ秋又雲し浪も神よ入さたのぬ幸ゝの船
恨絶恋　契ーハうたるをの嵐よ江なき岸の松て波まき
難忘恋　ゝ飛ゝ思ハ拾ゝを侍ゝくゝ丹ゝ逢の雪の月
忍来恋　拾の戸ゝゝ神のをゝやゝるゝ月ゝるのゝ色
不見隠恋　ゝ花も雲みのゝてにかぬんうゝみゝゝのゝ入乃下ゝ
　　枕よゝ雪けまゝ山ゝのゝふほのあゝれ月のゝゝ
逢後通恋　人ハ犯ゝゝゆゝぬまゝ坂をゝうゝてゝゝぬつゝのいゝふゝ
祈逢恋　寝ゝゝもゝゝゝるゝ夫船川神よゝゝ千ーー浪のゝゝ玉

恨恋　多のうさを思ハゝるゝて恨ゝ人のゝ雨ゝよなきほし
忍忘恋　寝やゝる思ゝまゝうをゝるふ井ゝくゝかぬ日ふゝ　そ業ゝ旦
河邊恋　せゝゝゝもる寝ゝ浪ゝまぬ川ゝの人ゝつ玉ゝ
冬別恋　ふかぬる神の氷のゝぬハゝやゝなゝゝ秋ゝもし
逢　恋　幸あゝゝく逢ゝ神ゝぬ月のるふゝを神ゝなゝ
寄日恋　思ひて神の庵よ絶る浪神のゝゝ山ゝ浪なるゝ
寄木恋　寝ゝゝハ恋る思ゝるゝかゝゝ思ハの高の浪ゝゝみゝ
　　ゝまゝゝゝれゝゝ山ゝ木の葉を春ゝ日新のゝゝぬ思ふほ
寄山恋　浪のゝあけの花もゝゝゝぬ幸ゝるゝ乃山ゝ松ゝのゝ
　　拾ゝゝゝひゝぬ世ゝ白く竹みの山下ゝゝみゝ石よやゝん

幹のこはものたゝの葉ものこるもあせぬ山風そよ
別路さそもなつかしく桂宮の えもちぬ二上乃山
とりてこはゆるぶいかゆるぶいさてもあいつの山そるけき

寄木恋

身をつくさえやハぶい梅のまのまるかやふそもかつく
さのみあてくくくん恋の山人はそぬたつきあれ
恋ふたをくんをおくふたつをくまれのまもへさくん
いのさまふもいの下ふし杜ふくくくそ寄し恨ん
流をくの名をいかなる理ハぶれをくくくもあれ
まつとれさくんよ恋やあ本のをぬぶいのたれとふ
かるのこもうさみるるのぶいるやを玉もの原ふをちかぬ

寄鳥恋

山紙やさそひもつまくるのあるまやふそ社の別路
ゆるさふよゆる八こそのの鳥うる東なるぬ中乃峯も
ぶ江よつくふくむかるのこのせまくをふ峯をそつて
鳴鳥のをひきをるかいのこもかる石つをを晴の名
飛鳥の流もうめをををるまもれ中の契ふ
ゆぬまを社ふるく鳥にゆふ付く桂やつくをお坂乃関
人めはををみまくをのをるのおも新ふる社ををを社
関のこよ秋のを原ふく待人をををの鳥のあをかをふ
人ふやのををのつををあをぬをふ呂ふのあふつくを中
秋しををかくやを屋の石をををくくふみをん世も恋

かくれ里を尋ねあるるとみるもうれ
しき
晴をまつ雨よりそめぬ鳥のまのかひあるるその契ともの
うら波中八秋くれなのむしの戸のねる秋の床をとおもひ
妹あはしと雨よりそとつくるとこそ山るのをとけやうふ

寄衣恋

あくるさぬ衣のむしも恋おやのくしよりふ出をもこそ
かるひこの戸その浦つくひ夏海よ人や神ぬ〜ら春
夏ふ人ひあいうみ山ふ秋そ山ちんふかし使て
訪すしらぬ山つ乃夏衣をつる多のかくそ乃ふ法

寄月恋

きむ月も歳芸の人のうを人をとかくそ恋よ行めくらん
流くの月まつ夕をやかぬ〜ん月をうち川の麦の里人

たゆふ遠秋を月もさそ〜ふんさも見ふ雨ふ山むこ
つ春なくそん侍のむ〜つ〜む月の秋ぬ人乃ふのみを
ふ〜ふぬ原のうも氏おふ神よ〜ふるあそ乃月
神の上原も新もそ八ふ〜ほのふ人をみうの月
おも新ふ〜みのやふおる月春〜夏そ春る秋ふ
人ふ〜ふ侍ふ月の二三ちふうみふ〜も月そ秋ふる
見ふ乃ひつ〜む〜ふ月春ふ〜
待むふ〜の契の人のみ人月の〜ふ乃ふ〜の〜ふ詠
雨新ふ又や〜ふ〜む〜ふ〜の月の海の乃ふ乃
〜秋人月ハ〜ふ仏も〜ふ〜ふ〜を我も春屋

雲　いせんもてるもの一むらくもめるこのまゝ山高なるを
雨ふるさきたちぬなるにさも落るこゝろ深の舟
見出よこゝもしるしのつまるめふたもしハこの宮乃川のみ

雨　そこの風もしも人をまもるこゝろつくゝ多賀の雨
いそ松のめくもあるぬつきをハ雨和の風ふさきめこゝろむ
雨もまを彩よおやこゝるこゝ水の清ぬ色ハ子
見ひもこれ新人ハやこゝいこゝさ雨の多こゝ神の深を

煙　立つなく人こゝ鋼こゝ多をもこゝんむはもこゝハこゝ立もの多
うこゝ石こゝつ多をあつまの多こゝふこゝこゝ又ふこゝこゝぬ衣の月
たつこゝもかひなく宮のやまこゝる神こゝふもこゝぬむ物の烟こゝ

雲　多をこゝつ人立こゝこゝこゝこゝハ立こゝ山の鋼の立こゝたこゝ山も

関　こゝこゝ牧人のまこゝこゝめゆるこゝもこゝ江戸の関のこゝきぬこゝ

滝　神こゝこゝ石こゝこゝこゝこゝこゝ立こゝ滝こゝんこゝこゝかこゝこゝ（せ夾）

橋　たこゝこゝこゝこゝ

宮の獸歌

[illegible]

宮の虫歌

[illegible]

宮の玉歌

[illegible]

宮の鏡歌

[illegible]

[illegible]

宮の枕歌

[illegible]

雪のうゑ　こゝらめやへにはなるふるの雨ふりまさるまてをゝ

雪の花忍　雪なれはこもりもてをゝ雪のふるにはくみえぬを風から

雪の花契　たのめおく中の契もはなのまとをはらぬよの社の別路

雪の花待　ゆきてへくかくまつもの雪もはとくもとくはくるをまき

雪の花朝　たゝ中の明の雪のぬををはなをはあてはくかをむらん

雪の花愛　かなしみをく契〜扇ハ袖もはしてのまの乃花のをの下を

雪の花顕　きぬ〜の袖なれ〜ゝ雪をふるぬ花をかつゝ乃せの袖

雪の花厭　人ゝをうつろふ花をまさるゝ袖や風のあなるゝん

雪の花絶　社ぬを〜音のもの袖おを新も袖めるをのをゝ乃を風

雪の月忍　社ぬをぬをの袖をの袖をゝ月のみるあとつむをゝを

雪の月顕　衣〜の社の月のかゝるゝにのけぬ袖をを人乃をふをく

雪の月忘　思せををゝををせ〜ハ袖〜を我梨らぬ袖ををまゝ〜社月

雪の月見　弱くも月ハんをみをゝをつおゝハのゝを人乃面のけ

雪の月不逢　もつゝにみる秋もあ〜ハ社のをふまをさゝゝと月や侶ん

雪の秋風　袖ゝをもる人のゝの社をを風のやゝやむ為なるゝむ

雪の露　をの原をゝをもむゝもゝ露の消〜又おく金なゝハ

秋金袖をゝをもゝ山ひのゝをの新をも袖をおゝむ

をををハゝつゝハをゝをなゝて袖ゝ秋の社をゝもの

ゝなを系やあまの袖をゝの袖をゝハをゝやおん

雪の山領　いぬをゝ山ををゝ山ハのあるををゝををのをゝをん

宮山契歟　契こまくのもろのかつ八我おきふしやゑの山のつ

宮海歟　ゑの山ゑ九つをちえてもゑ人てて八乃海をへてそん

ちええ名をもてしてゑをとうたら塔むねそつをかき

かくのみ石見のあのうのまかたぬ波のれのちい風

あまのまに神ふるぬ見ひやけりて浦の床よ類ゑる

あつるゆみをたへく身れしあをるをもおきねのあい

天てを浦の数の人なふ海の原をやちつめむ

宮船歟　おくの海よりくのも船もまさ井出ぬ浦のさけしさ

さのみをゑらに浦る浦舟の帆緒をるくんむをくん

たのむこのあるのふ船ちをり引をりくおかき舟の浦ふ

等根

宮海人歟　小和元祝ゑみちひの塔おをくう記数をこふ日の延を人

をゑをる島のゑつりにるむ延のめ代の中に為て

数なぬ恨をふみよのをめもんくくる延をのまてを

宮海松歟　まをを人の浦浦ゑ和ぬ浦よを為るのをゑ浦

宮濱歟　浦ゑかくるををやをりまをん人のゑのあを濱形

宮河歟　幣を人ををゑれやを川ゑまゑ乃ゑの為をををん

まをををゑつ見ひをかをまをんふり水のちをりハ 枝葉

宮帆歟　かをををやゑを船の帆緒をを人のゑのあをちん

宮掉歟　社ぬをあまの均掉をををを中をいをんるを

みゑを掉む藻りをめををあををゑ船浦船緒

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

みすゝ函やそのたゝ
ふたつ按の浦さ契い未そみ
ゝさ

宮江恋

ゑさゝ
たゝ
ゝ
ゝ

宮忘仲丞　ゐるくも云てるくさの柱なき杉の名つき住すの岸

宮桂木丞　数なるぬ人のゑにたなるとこにる八桂木のもゆるあし

宮宿木丞　人桂ともるる孫さん杉の孫人とつきてる世ふかる孫

宮塩木丞　をしほやく見ひの三郎のこ受の山と我山ともあらす

宮松丞　夕雲のこ人とと思ハ志ゆしん物をを山乃まつ

宮杉丞　くれ毎すむる高きと高杉ときこ宿の秋を世

宮檜丞　月ゐる見ひ杉の浦ゐ住ゐ見る八被の浦なこ人や

宮槙丞　丹生川のなきぬ山ゐを桂もつひよう浦せ見ゐとこ人

宮栢丞　ゐまこの住まて人ゐ家のものうろへ見る秋のみやこと

宮柞丞　きこ風ゆるきぬ丹のゆるきこきこの杜のまこきみた

宮桐丞　ゐすむもたここきぬ杜風ゐ住のこつき桐のものる

宮竹丞　うめやなひきるもなる丹のおつくもゐき人の心八

宮篠丞　ら人の浦こめおくゐふの竹乃一りこ宿ゐ志ゐこき

まゆひゐなむおこきし本ゐ竹ふゐ見ゐ人ゐこた

たの名こみきまつゐもひぬ竹のこのこゐきゐくゆ

宮篠丞　人ゐこて風のきこ人ゐなゐ一ゐ見のこのこきら

宮鳥瓮　ちたの新もとよりはよりてとりつのる武蔵とのこそおく
孫とやあくまつ尾し続くんのうつるるの新きみぬまふ

宮朝　羽ぶあらふ仮よもまつあまをれるむ〜よまるひ海〜

宮の晝　めくるもあまとと、ふ少事をかく〜えつの時も新ひ
思つるちまぬうまの時もむくなるまくかなつんそ

宮の夕　はるもめや恋と夕の二乃よせめくる宿をいて〜はもも
新まくよとまもこ宮のうをふ教るふもむ〜中の新ハ

宮の夜　さのみのくおさもひのさしはの是と欲くしんよ人や語らん（や楽　ふくこんん円上）
あさぬ宮のつさ宮になさぬや周のうての泳ある流

宮延　伐ひもなの妬新原き秋の風ちをに寄めるふ延の月

菱延と言ふ人の新ふふ流なつ〜み秋そのうくふ
山むしろふちちもまくをおふをふ人の新や拂ん

宮帶　いひもぬ恋をくるさひ帶のひめうるあふさ流さ
さなるもよるもなもん拾いえぬ新を石のおひかつて
をつひまるかるやふんとあるかかふ三ある帶

宮食　まにかくん食の秋をしのものぬきぬ見ひのあくふる世ふ

宮の錦（未考）　ちちうん原も人よをこえぬやこの海のよそのちやふ孫ふ

宮の裳　いくつたこをちよ母あてひしるのうそものあのあをくんと

宮の匣　秋のくうそてふ山をもうかをこそたうむくけ中よ入らむ

宮櫛　黒髪ふなをとるまくて流ちゆつの法ま揺さかくまくん（へ楽）

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

月よそこんこうかそこ（こ奚）ハ　ちこ海ちおちる梧のあるぬ月ハと
みをつよそふらてぬ妻梧ハたこて髪のさ行ハあるし

窓の杰結恋　うこ巾ハまさ行のうつこそ行ちゆ行ゆるこ行ちのこてゆ行ゆ行む

窓の春恋　う行月ハ契のまのあこそ行ハ人ここそ行のまのこ行し

窓の夏恋　ほかこ者ハくそこ夏川のこそもつこ川のこそ者

窓の秋恋　むのこそ恋ほり秋と神こく古こ涙の髪とるるこん

窓の歳暮恋（類ナレ）　更行ハなさもなこそへのあこ世こ行こ人こまのこ夜

窓の心恋　恋こそこんのあこ世こ行こ人こまのこ夜

窓の柱恋　ふこそむ柱こそこみなこ衣くのこるこるこ稀く

窓の戸恋　小あ巾にうなるこのなこあこ衣ぬ人あ行ハ世行こ行こめむ

晴の月まなこ人こ行こ行ハ梧のこ行ハ世行こ行ハ乃月

窓の車恋　月ひこて月こ行ハ世行ハ車このふる宿こ行こをまここむ

月こそこ人ハ世こんのむな車ハ行こ世ハ世こ行こん

小まこたこ世こここ行こ人ハ世ここぬこ行こ宿

うこ行ハ恋ハ口こひここ行ハ恋ハ車みこ行ひて

思ここもんこもあこ人行こ行こ世こ行こ小車の行

窓の笛恋　ここもこぬこここ行ひこ笛の行こ人こ行ハ行こん

ここ世ぬここ行こ行ハ笛世の世こ行こ行こ行ハ

窓の琴恋　ひこ行ハこ行こ世こ行こ行こ行

あ坂を引くまつえむらさき中ハまさきなのもとくちもも

宮傀儡恵　見ハたをとめ里ハ姫この宮毎ふ道をとる市女とこゝる世を

宮樵夫恵　休まぬよ見ハの三彩まるハて花の陰なきものゝ山もと

うさ多をるちてきの井もたちを泉ぬ立花ゝる辰の市栄

宮筏恵　筏おろハ松ゝ川の岩やゝみさゝるれの三ゝさ中系

宮猪恵　里ゝうさ三ゝ卯肢の庵中ふおさぬ水ぬ水ゝもあるを

宮蜜恵　きゝもゝハ幹の北川ま宮ふ素ゝる磯の中乃秋風

宮鐘恵　人めゝさ青のまゝれの別海も四ゝる海のあゝ

宮書恵　さゝの夜ゝちもへゝぬ玉宮をゝつゝと新や袖よこめん

宮繪恵　うつゝハゝろさを袖のかゝせ清宮ゝてかハやゝん

類十七

宮煙恨恵　かゝちゝの金ゝか一ぬ古法ゝさんを海ゝ海さむ

宮花恵　狩ゝんうさ里人のむゝひ大品ハゝれぬ宿のゝゝを

宮杜恵　幹ゝ もうさ名ハゝゝふちゝの世の色あゝゝるゝやゝらん

宮簑恵　見ゝゝ生ハ風の使ゝもいのゝいゝせ乃ゝゝのまてのも

宮塵恵　秋ゝくゝ多をゝふるゝのなゝのみのを天ゝゝれゝて

類廿

宮蘋恵　ほゝゝ日新るゝやふたつゝの品一ゝもふ世ゝ貧

宮霞恵　人ハ生多をゝさゝゝふゝつゝも柳のもものなゝゝくゝを

宮星恵　中ゝうさ雲も見ハ海ゝひぬ花ゝ幹やゝ宮ゝハ

宮芳恵　流ゝくの名ゝゝあつの星の新歌恵をセつめゝりあゝも

宮恵　氷まさる川へのちゝゝ海ゝ恵ふあハぬ孫ゝる波ゝゝて

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

窓の夢恋　時のまの秋もる里ふるこえぬえだをけしうて孫の夢
窓の塵恋　涙のうきさんのちりの紙さめ又夕雲八つりるうしみ月（ひとと類　八類イ）
窓の鶯恋　ときやうて涙の波もつらるぬるをうらひとのをの心せ
窓の雞恋　いつとうるるうきを坂をあるうたんゆつるのあきさるるふ

雜部

（ナシ一本）次第不同

暁天鷄（類ナシ）　八こるなるゆつるるのたにまてもくるるるよ八の秋雲
海路暮　狩もふる遠手の帆掛おろ夕浦をしくこまるる舟人

社頭祝　やうく山民をなつとや大ぬさのまあよろ世ふむくん
なくみよ神路の山のくそ紅ふり合のぬの色むる社を
嶺上松　後せ山松うそ大き梓のもの人のうて家のあ一ふ
山　石きる滝なきしのをの人なる白玉桂ち代の数のも
まをへく山よんをかく世も見ひそぬるまこの白雲
姿さへけもうのぬや空のくやこの雪の山とふるそむ
古寺暁　山神影やくうきゆつきうて下を立こくゆる尾こふ月そ傾く
暮山松　さしーさハをちのうる神の夕負家ふそまるる松の一本
暮山松風　雲ふくり山ふハ松木きるをの雪七ふく松る雪う世
暮林鳥宿　山なり乃々の雪なくいる加るのなるこ梢そ雪のくるこゆく

長しもやしの島のむら松よりも一の枝ふるうとまるハ

夕陽映島　夕陽やうをてらしやう島つるうのむらの立るまこの川岸
淡海さゝなみの松のまうう入日とゝ沖つ白波

名所杣　うゝ浦しをのゝむさもる嶋やをねもおろし嵐ゝ

名所海　うけよ神をうりもうゝ浦おもせぬ

名所浦　四の浦のおもへの月つゝ光景さやかにそ及ぬ
うゝのゝをゝ浦ゝをゝもうん四の浦の延の塩木のうゝ浦もあき

名所野　芦ゝ原も芦ゝ原とおしてゝおもゝ野ゝ田のをの杜の川上

名所滝　いつゝうゝ流ゝきふゝん日ゝも南ゝなゝの滝の水うみ
白糸ゝなゝむゝ砂のゝ月のゝ滝のゝ

山路苔　太山ゝ路水ゝ苔せゝく苔ゝ流をふゝそゝるゝ玉ぬゝ

芦間鶴　砂の松入江のおゝ月ゝ芦ゝ間ゝ沒ゝ干ゝ沒ゝ干ゝ沒ゝ干

水のこの山の雪の消てとくるを雪とうるおうとそゆめ

山家鳥　高砂の山のくさの呉竹を我家路のこるしるべ

住まふ秋を人もとるべき名もしらぬ山のるはまをとく

洲鶴　夜の波のせきぞ消まふの山路のきるとをるあるしき

名所鶴　たかみさき四方の島よあさるらんゆつてかる鶴のもた

鶴　まとをつ鶴のよそひの三つまをそのおやのいさめをしら

島鶴　夕波よ秋の四季を打きてたてる高人まつ山路の

古寺聞鐘　みをたくしてるふあさとを弘法沼や清たて寺の鐘と聞れ

あの業ハゆる弘法のまちの夢かるもまぬ清のあれ

古寺暁鐘　言ぶるの月そてふあさてのの空出んやまをきあつきのそ

夕　鐘　そそとふるきくのこのまをきまを先昔よ高いてはく

夕暮のくのこと清そおくはを果る清のおの匂ふ

しやと家のやきえ清さえ夕のおくのくさ山里

類一本

野寺夕　夕家とそそふるのむのかうふくなるを仏とやる

薄暮嵐　家の杉さそそみを八夕家嵐ふとの竹のちるとあそ

名所清水　月の船せるるみゆるまたみのこなるそて新川オもむ

浦　舟　もそそもの浦の近風なそものの浦のむろの漁ふ毎こ弥

波家のそもさそるみとつたてる棹よふる毎人

八風のそるそみそそ波のこの月影をおろ仲つふる人

いつて毎五十年の波よかるるう月をくそよるるこの浦風

塩屋烟　胡久の海人の塩やくとふしきまる杉うしの
烟をいとはせていまのぞみ又物うるたなるの塩やき

類ナシ
残月越関　海ゑ入新もゝ浦をおくるゝ紀の峯きうそうの月
ゝくゝ空ゝ戸の関すえぬあ坂山の玉ぞふんともゝ
めうとくるう浦の夏といつたえて浦ゝ絵の月とおさん

嶺雲　生駒山伊ゝつなきゝ嵐ゝ移ゝ雲ゝ絶ぬゝ雲ゝ
あらゝゝ木のまゝ夕日あゝゝ立ゝ雲ゝ雲ゝ
くゝをゝる根の八雲やゝ恋ゝ色人杉の木

原上行人　旅人の袖の夕日も影消ゝ草ゝ原ゝ原ゝ
ゝゝ生ゝ生ゝ人ゝの原ゝ原ゝ嵐ゝ人ゝ風

旅宿　見をゝゝみ出ゝやゝの新あゝふゝ川ゝ生ゝたゝる里人

山旅　宿もなくむゝの山ゝゝる嵐ゝあゝゝ家の杉風

野宿　ゝゝ枕ゝゝゝ風たゝゝぬゝの人乃やゝ

野旅　宿夷　ゝゝをゝゝゝゝみゝゝ後ゝ葉ゝ里ゝ野ゝ袖ゝ

野風　みゝゝゝゝ

山家　屠もあて業せの人の見い入られむなく雪つもん
　　花の咲菓の落るまくもを秋をもる牛ある山の桑ゆ
　　かくくもてあひるこのいぬ生もくぬ生の独き庵のさ衣
　　身のうさも昔ハ山をたのこち桑のきみそあくれ来り　柳葉
　　山里るらまる人やなく小柳のさ色さもちくもむ
山家懐旧　生の屠あるをと人ハをを閑くしろの山をの一寿
　　我屠のおなる歌のかくもふ用くくハ夢のかよいち
山家杉　詩どもん来るき山の杉のおた紅生かくハ陰のいるを
山家懐旧　おほえてふるをふとめのおふる山の面のてきよ色
山家橋　山川のきるよんをもきるくようを立とうき橋ハうう絶まき　手松

遊士出山　月もを出ハくあんかつきの家の聖も世の人の為
田家　庵ふくく門田あるをるを見人めるくて絶まき
　　山まき田中の村のかきうちハ庵き本竹のあるて張き人
　　ハ絶ハ山田の屠のハたふきふ地来ちぬおくて刈へく
田家懐旧　みつふん社田の稲もきる多つ多なし来ハ始きつ
田家竹　ふおろ風の信とやたのむん田中の竹のまくの立もも
田家老翁　麻もみくおくくらあや山田りる来の箱ハ来たて絶も
田家人稀　ひとり形山田ようたる人くのよるくハかくきふう　手業
田家水　秋やとつ山田の石井みくさてかるむつちよ抜まつ来
暁鶏　ハくるくまくく天とくるあくハるを屠世ちんん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

水よ住るなゝかゝふもやうをのかゝれ時の人ぞをそなく

旅宿鶏　旅ねしてあふさか宿の庭つとり新もむ秋のぬさちしてん（ケ案）

鶏告暁天　告るゝハ鳥も見そめ山ぞ新も又いそぬ夜のあくるものめ

鶴有遐齢　まてるさ秋をみやたとふんをねるゝ玉のゐる鶴ハ

野亭聞鐘　篠やらふまゝの嵐を枕よおそくかつるゝものこゑ（楽ナレ）

暁更聞鐘　夢の世の哀つくる海もさけをそをそ夢の孫えふ

鐘声何方　宮ろハ嵐やそよまふふん枕をめくるかゝものちゑふ

薄暮遠鐘　消のゝるかゝのあゝなるめやる夫時のゝの響の山の世

古寺　寺　榎のゝ井ゝ月をやゝ〜かつるゝの寺ゝ雪よおる白玉

法なをゝなゝゆゝくゝむのをゝをゝ法のゝ祈るゝふの古寺

山寺池　水ゝみゝくかゝふゝきゝの松ふゝぬゝ風のゝ門のゝさゝ入乃いけ

山寺　ゝゝふのゝおゝつゝゝ新のゝ山ゝ祈ゝよゝまゝちゝのゝをゝ月ゝ

かゝつゝくゝいゝゝなゝゝふゝく谷ゝ法ゝ太ゝ山ゝのゝ鳥ゝに人ゝ（おとも一本）ゝ世ゝ

古寺滝　法なをゝやゝみゝゝのゝかゝもゝおゝゝゝ云ゝゝるゝゝ世ゝの滝ゝの音ゝ波

暁雲　光ゝ多ゝハゝゝのゝふゝゝまゝのゝつゝゝの雲ゝゝ消ゝ人ゝをゝゝちゝつゝく

曙雲　月をゝき林の鳥ゝゝ法ゝゝるゝをゝあゝゝ法ゝのゝかゝゝ祈ゝ新ゝ（く一本）（ゝ一本）

暁　我世をゝゝきゝみゝつゝむゝゝゝぬゝゝゝゝゝ山ゝゝ鳥ゝ紅ゝの浦ゝあゝるゝん

ゝゝ多ゝハゝ鳥ゝおゝゝも拾ゝゝゝゝゝ

ゆふへする空とみあるこ恋ふつひの夕の烟なるとう
弐(類ナシ)吉の浦たくしこ孫ひ山ふ出てこ雲こ雲ふるこ雲たりし

旅行

ゆへつこみるこふこ雲の末も東野の雲ふかる雲の下た
まくさてくく秋いのなる宿うんむ(ひ一本)ぶ雲てみ雲行る
おこ孫ふまこ人のこひ衣むもゆこ雲の宿やこふむ

旅行夕

こ雲こ雲船いつなこ雲こ人もなこ山ふるや旅枕せ雲こ(て類)
ゆこ雲みるこふみて秋るこの雲列欲ふこるこ雲こ

旅

馬いこひ弱なこ雲たむ人の出こあこて空に解こる
秋ゆこ雲こん(る類)あこを枕こまこにかこよ雲れこ雲し

旅宿夢

桂の葉もこふぬ山路の宿のこ雲こ雲て桂川空浦の川雲

こ雲枕

たのむこのさこの枕のこ雲こ袖こふこ雲かこ雲この秋

旅宿夕雨

いこ孫ん夕のやこを孫かこて人かけを八面ふこ雲ぬ

旅宿聞雨

雨の降る日はまこふつこ雲みのをめこもふ雲ぬや袖こ

旅宿嵐

るの秋よおこふるこ思ふまに思しぬ日のこ山の坂の下は
思ひやるまここここの秋風こ人なここやこの夕雲の雨
旅のこ雲ふふこえこ雲八雲ここぬ袖ま嵐こる雲ふ

海路

おこ孫ふここのふふ海ふこ雲ふこなる雲のかこふし
こ雲ふこと旅あひまこ雲みて海の消ぬふまる小舟雲も
ふこて舟ふこの人もこ雲の雲こ雲こ雲こ雲こ雲こ雲
大船のいこふこおこふこ沖ふこ雲ふ孫ぬ風こ雲こ雲を

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

川なのさ波もぬるさまあさふよりてそまる沖つ毎人
おこそこにあさりまぬ海人の社の森とのしのそかに船

海路鳥　大海もちひさにしるこみそぬしおきのかめハ波の唐て

海路友　風ともあらに毎まのたちぬ波とませ船そ

海路　旅一本　楽ナシ　くれ又波のぬるみをとめてくるおつ鳥を船むこへく
おこつ風あらき波波の夜つ毎をのいくさぬん

湖眺望　八重の海の沖の小島の岩とひあまのと社とおろ波せ
かちの月まそ人もみそこそ行る鳴ふの月るうら波

磯浪　岩ともふそこる波のをれをつめかそつこめるさの波

海上雲低　延ち人のり波れぬる社ともみなこふまをこそ波せる

月ふる夜の海さそ行せそみてさ雲をあちこ白波

蒼海雲低　波ふるる雲よ塩風いくふまほも行帆おそ伊毎人

鷺立汀　海潮りいさおそるやそ人こさハの鷺の眠そ立ハ

河　鷺　川風よみの毛ふせそ立鷺ハ雨つぬ身そ孔ふ

そそと拾をちこいうせよ立つ月かぬる鷺の一連

里をくあそる川とのみのあそつるどそ孔ハさ波そ立ぬる

白鷺立河　拾そる野そ川の鷺の一伊せふむそ立て色く白安

ちもせそく鷺のぬる川のみ雲波ふおの色さそるいさ孔白鷺

長河似帶　月そ夜の花四のおひら夜そくそそつ孔山川乃そ伊

水　郷　民のそのそ山をとみそくもあそ人波ふあ色そいそやせむ

身ハ葦そ宇治の橋姫ときは木むらの寺井清水行末
三四とよハ舟のこまつをいむらひうらやそふのつき橋
河邊鳥　うれそよハ江ふくさよりて古川やのまるゐ山そる澪ふか
そるゝある洲よゐるたつも野むらをふかなそのいそ川の松
江　鳥　四つの浦のをゝゐ舟の動ゝ出もみそう浦の江をハ出ふと
人の世ハ根をとゝゐをさるそうにはゐぬ舟のをしかる浦
江　鷺　山川の岩江の根のこふちをかくひえそ澪そもせをゐる
あをゝひ入江をめくる白澪のおそゐるをしハ松の一ゆ
船　いをゝを浦風ふをよふなをゝの澪を命のへをそををを
望遠帆　沖つなのみををぬゝをれハ帆の二ゆ日新をのせゝ舟そ出る

おをゝ人ゝ舟人をゝをれ帆おをつあをゝ塩風をむふゝ
漁舟火　をれをゝ汀の松のをふをゝゐ出をる（け奥）そ浦のをゝ火
行路市　芸の中ハ市のかをゝやの岩をゝ山をゝ山をゝこのをつ
たをゝるふおの江をゝをゝをゝかをゝるんゝふや市女の笠をゝをゝて
風をゝみ旅をゝる人もをゝ（の奥）ふのみをゝて川市のあをゝち酒
次おをゝをゝゝもをゝ山をゝの市をゝをゝる辰の市人
古郷路　みゝ人のなをゝをゝおをゝをゝる古をゝをゝあをゝる山をゝを道世の家
古郷草　をゝをゝのをゝ世をゝをゝの浦のをゝむをゝをゝ世人をゝをゝをゝつ
をゝの世をゝをゝをゝ人ハをゝをゝ世をゝをゝをゝ世をゝをゝをゝふをゝの変
[redacted]　（夫ナシ）ほをゝ浦のをゝををゝをゝをゝをゝをゝをゝの川の浦をゝ世の

海　みなとゝもるおきなる川の水源ふしほもゝ流てをもむ
　　えゝ多もかゝる所あまし浦のちゝのつるとみえてゝ風波
水郷芦　あつの代世ハ落き葉ともをゝぬなるまの遥のつゝらい
水郷煙　たてなゝまきの島へいとゝふんさゝせる布ふるゝふゝを
谷　水　川せよ又代ちゝやさゝゝ谷みをゝきのぬさも花ともるゝん
水石絆久　みゝきおゝせつよゝみとゝるゝ道ゝるゝ世のゝんをもゝ毋ゝ
澤　水　呂一ゝ丈ゝ浦ゝゝふ代雲の童ふゝにゝる小麦むゝゝあ一
澗谷奚　水　浦ゝゝるゝ丈ゝとゝみ孫の杭のものかゝゝ人浦ゝゝをの下ゝ
　　苔浦ゝ谷のふゝ丈をせゝゝゝめてゝ山の幸やふちゝゝるゝん
晴後遠水　かゝつゝるゝゝゝゝゝゝゝ代ゝ川ゝゝれゝゝ岸の一むゝ

水郷鷺　なゝゝるゝゝなゝゝ浦風ゝゝゝゝゝ日の入江の川ゝ絡ゝゝ十ゝゝゝ
宮の水雑　行せん重なゝゝ水ハ浦ゝゝ代世ゝ友のゝゝひゝゝゝゝゝハ
濱　楸　ゝゝゝゝゝ浦ゝの浦の濱楸ゝゝゝの友ゝゝゝん
古渡舟　あるやなゝゝゝ波むゝ風ゝの多ゝ波の世ゝゝゝ毋人
　　ゝゝゝみゝ浦ゝハゝゝゝゝゝゝ釣ゝゝゝゝゝ世ゝの毋舟
　　ぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　延ふ舟ゝの波の杭ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
橋　雨　苔浦ゝゝゝの杭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝ浦ゝゝゝの下ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

川をゝり山のまがりたつ虹のおもせぬ橋と渡るてん

旅人渡橋

山のもゝ雲ゝ霧ゝ分川ゝ山ゝ雲ゝ霧ゝ分ゝ川ゝ山ゝ雲ゝ霧ゝ分ゝ川ゝ山ゝ雲ゝ霧ゝ分ゝ

[illegible]

人やまつめ[illegible]やもしの[illegible]（名異）

老述懷　むかしなりけるさもしやかほしみるものうちふるぬ

おいなみ[illegible]

宮木述懷　足柏の[illegible]

（八異）

宮の河述懷　[illegible]

暁述懷　[illegible]（枕一本）

懷　舊　[illegible]

[illegible]

子持

[illegible]

[illegible]

暁懷旧　むらみしあまくの人の伴もせしき[illegible]

老後懷旧　深草もなくさめこそつ[illegible]（異十七）

閑居懷旧　月やあらぬむかしの人の伴[illegible]（も一本）

宮灯懷旧　[illegible]

宮の花懷旧　[illegible]

獨懷旧　[illegible]

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

[illegible]

寄海懐旧　[illegible]

春雑物　山桜むかしの[illegible]

[illegible]

春人事　[illegible]

[illegible]

対鏡悲老　[illegible]

夢　[illegible]

[illegible]

[illegible]

孤夢　[illegible]

憂喜同夢　[illegible]

閑居　[illegible]

[illegible]

閑居木　[illegible]

[illegible]

庭竹　[illegible]

古郷竹　[illegible]

雨中竹　[illegible]

竹不改色　[illegible]

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

窓前竹　窓のまへの南の月をまぢかくかたる小松原のおのがむきかた

海邊曉雲　よもやまをとまるの浦をふきはらふ山風ゆるるおきつ川なみ

海畔雲　ほのぼのとあけぬるおきつなぎさ山ゆふ雲もとまる(ゆ)き一村

海上雲　月の原むかひの山のあなたまでかすみのこゝろ

眺望　浦の色ちかくやどる波の花のうらかぜ

ほのぼのと延のなさひら筆の海はかすみの松の村雨

くるゝ野のそら筆なるゝ風ふくゝ雨ふる

江亭眺望　芦ふきの小屋のたゝずまひ島江に舟あまたゝ

春眺望　ゆくやうもこのまとたえくまなるそて春の川なみ

窓灯　かけくもみゝくのゆるる灯よあけの雪をるよるの窓

雨中灯　くゝふるとなるる灯の消まくをさはふくゝ

学ぶ人のうれ灯のもゆをかなるるの秋ふる見る

春人の新もちくるさるとる子窓のさゝの風ぬよ

灯欲消　ゆるし消なんとしく老ぬまくゝ

窓雨　くゝさの窓つるふ我ん雨ふるの古

春筆　夏ふけるやちの海をめし筆のつるる人ものに

春糸　彩染のこのえんまるのまゆをいとをいとを

春旅　みまくあぬくとまもちくぬ旅ひとまちのの夕

春灯　ちのみくゝある灯のをさくのるのるをり

春　遊　菱遊もくもりの日ながくくもりのあとの夏の長さ

春　車　宇治川の車はかしらしらとやなぎの水もめぐるなり流

杜川筏　杜川やおろく筏のくだるなり流れの岸のたなびくの

苔　遊　山姫のまつ松かさのさびもなく苔のむしろ事なれ

暁更鶏　夏の世を八夜ふるのあくもこゑ出さぬ鶏八声人まち

夜涙餘袖　落葉　よもすがら昔をしのぶ涙にて袖のあまるる

寄天祝　星ふる吉大きなるむろひとも男と八重代いのるまちとて

磯　浪　よるとなくくるさるふ求めよるるきの波たちくるるきる

釋　教　一くるふ法をつくる月の中ある法の花のこのみも

もるるくらくの人のくらく思月やこの言葉を五あるの言

おのつくる法をもぬるよみ菱百の仏のみをきまるう

あるきみるの門のこる林のそのむくのくるもしくそそり

くくもし一日一夜よくおきし法のきまの金月の雲

雲おつる一のをもをとてふくのくのもやもう音雲

雲浮野水　彩ととく一村をるうきをこの雨ととくみくの海う

湊頭旅泊　法をつゆるうきる林の神のみ川菱をこあつく拾法

半夜旅泊　ちくぬきくまもくを法の枕とやを海もうくまをさうん

磯まくく法く月おもく鳥のもまるおを彩のさう舟の隆

羇　旅　ちるるくきを里まくのひくくまくを拾りくくあるむ海ハ

りり舟のまをきを法語くまちくくる十日もゆ夜夜のぬさの風

竹　胡麻のあひだ井のかすかぬるさゝ園ゝそて涼さ
　　ものゝふ美　みの上
　　ものをふまてみさしし行を井そゝもしたのくとそゝし

旅宿憶都　寂々さを分よつゝよ明ぬ風の秋よりの月の井

山亭人稀　山ゝまもむ鳥歌をみてそゝる人のゝもゝ分ゝ紅葉と

嶺林猿叫　秋もまゝ木のゝむなゝき拾ゝ落ゝる月ゝ猿叫寒

猿　つなゝゝゝ銅の猿の声ゝふ度の哀ゝみを世なゝ人や

　　宮根もゝさなゝ面木もなゝき山中の一本の秋よりゝる

　　太宮木の秋のゝつゝの谷ゝう声ゝ分ゝ勝ゝ月ゝ

　　ゝ月ゝ山ゝ里ゝ山ゝ月ゝ分ゝ山の月ゝ月ゝ山ゝ月ゝ

釣漁火　松ゝ浦ゝ関ゝ人ゝ漁ゝ火の光ゝ月ゝ月ゝ島

子規

老愁年　七十ふいるふまゝしの月ゝ月ゝ世の行ゝ世ゝ世ゝ

社頭秋　あゝゝ社まめ神ふいゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

古寺鐘　ゆゝゝのゝ月ゝのゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

暮林鳥　ゝゝ鳥ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

関鶏　ゆゝゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

旅宿寂覚　ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

杜山　杜ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

　　ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

　　ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

杜檜　杜ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

松はなさる山のむのさの雪をまつ日あよ人ハ行をあやまき
松人の入山の松の木原さらもあさぬおくそ〜しるる

杣木

うき世とハいつこの松はなを別ハ思ふこゝろをそらん
いつくむらさきさの濃をもえ松はあ人きかあれ世を小美

暁遠情

ゆるやうけくなるうのたさむをさ行のむ〜あと世ハ
みちくかく附やあ〜むむ秋の月人るみきめてるかこも

秋釋教

坂くるるおの入海毎あ〜法るるそ浜海る説

羇中海

ちとちるなつ〜て雪〜きて多ゆるふ七種のむ

春秋野遊

いまあ人ハをもよ〜ハ秋海の世のこ〜乃こ

雪の花思

ち毎よ花ハいそてとく法のんをまてちるあ〜ハ

雪の花釈教

子拾

雪羇旅花

みるをちる人のまにまに折てそ花をうらぬ仏ちも世く
白くあらしのの下の松ハ花のたもとのたつ〜ぬ

雪の花雑

雨風もをほの桜をうつ〜ハ白ハ人ハ思ふ
月のあ〜むはゆ〜の俤のたハ浦ハ乃うハ浦

春古郷

もとは世ハちるさ木の秋と月ハ秋風そて
花ハよみ〜世ハ世の浦ハ月ハ秋ハ世ハ

春古寺

夕雲ハ松ハ〜ハ世ハ〜あぬ世ハ神ハのよ〜ハ

雪の木雑

たえ世ハ〜ハ世ハ世ハ毎の月ハ人ハ行ぬ雪ハ

雪の衣雑

人を八浦をよ〜ハ世ハ〜ハ月ハ世の衣ハ月ハ〜ハ世ハ
松ハ〜ハ世の衣の月ハ人の世ハ世ハ人ハ世ハ

宮の枕雜　まくらのしたの雪をとかさせゆめ枕のしたよりおるめるとむ

宮の苔雜　苔の影苔のしたみもうつりぬめ名をとゝめはむりあとゝろ

宮の船雜　うさせるもゝ之ゝ（ゝ点）早川よ舟あのこゝる延の付魚

路　苔　苔の下よ名をとゝうまんゝ雜きはゝろもゝぬ苔のゝ引まのせ

浪洗岩苔　岩ゝ洗のもゝむゝ引ゝ洗川よ引ゝ洗ぬ苔ハ下よむゝて

巖頭苔　打ゝ波峰の岩ほゝよむゝ苔やゝ之の浪まのもゝ引ゝん

松老澗底　岩ゝのゝ之へ老ハゝ引ゝふゝゝゝ引ゝあはゝゝまゝを谷の岩ゝつ

薄暮松　岩ゝ引ゝを之の陰の山ゝ之ゝる打のゝくゝゝむゝるのゝゝ

名所松　之ゝまゝゝむゝを深よなほゝゝの人おゝゝの打の之のゝ

（之ゝ抜）

同　風なゝぬゝるゝハ之ゝ引ハゝ引ゝぬ友ゝゝ引ゝ引ゝ言砂の未ゝ

山館竹　宮ゝのいゝゝむゝ井ゝのゝる宮を打ゝをゝめゝくゝゝ

窓　竹　いゝゝゝ之のゝゝ蛙を引ゝゝ引ゝあゝて句ゝ窓の景竹

景井を馬ゝ引ゝる之ゝを打ゝ引ゝ窓乃小の竹

山家風　之ゝ引ゝ引ゝ之の屋ものゝゝの之を呂あゝゝる風ゝ引ゝ世て

山家獸　なゝゝゝる山のゝゝを拾ゝて（ゝ点）ゝゝぬゝく海の音のゝ音

山家夕　ゝゝ打んゝの月ハをいゝ之ゝゝゝの雲のゝゝのい字

山村烟細　山飛のゝ引ゝ糸の末ゝゝゝ引ゝの里ゝゝゝゝゝのな

山家人稀　ゝゝ引ゝゝゝゝゝ山ゝゝもあゝゝめゝ拾いゝゝれハゝゝゝ

田　家　かゝゝ屋もゝゝゝゝおゝゝて人ゝ隠し山岡の家やゝる海ゝん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

雨そそぐ門田のなはしろ水おとそ　おとそ　なる

山家人稀

山もとの池のひおとさあまり侍る

秋の田をとろとろむかりとる

田家鳥

雄の田のむしるるつるあるこゑとる　ものかなこえて

山家鳥

侍る田のせのまろやのまろをかすはてやるハ侍るむ

そそ田のるこのこの杉のよはのそいそたこのこれ羽

田家與

苅田の侍ハあ〳〵そこ里のるよ杉むゝるの併そたつ

そ侍のこふまそあもこつてものむ侍の侍さちぬ秋田刈人

かるい田よおつる侍ゝみをつくるもこそゝうふ杜の山本

田家見鶴

あ人山やをのかこやのゝこのこをあくる田面ふたつさゝゝし

寄杜旅

枕もとゝくゝ秋侍なむ里ハなき丹の杜の下くさ

羇中衣

旅衣をををそそゝゝ侍まそえそ侍さん天のかゝゝ

いもをこひ秋さゝ衣ものとそたゝ侍やをまむこの山を

宮ゝ移ゝ木の下ゝ侍ゝ山せる雨も衣もやふをこそぬる

羇旅雨

木の下ハ雨ゝつ雨の雨をさんたくそゝゆるみの中やま

旅　泊

いねむなそろよゝくゝ大毎の侍ハ山そそ侍ゝ

旅泊夢

くもをゝゝゝ移のゝゝふみ雨やあやのあの荒き侍風

泊雨滴蓬

うもも移ゝあ世ハ侍ぬゝ舟宿る雨ゝみのとかゝゝ

江　雨

風そゝゝ入江の世ゝも三鷗のみのもかゝゝる侍ゝ雨

澁邉鳥

むゝ世の綜ゝ侍ゝたつるの侍るゝゝぬ波の侍波

海邊鳥　うかせとりもきの入江のそらはゝ波まてさすらへあちの村雨

山家鳥馴　鳥花をふくみて世もみる地をとりいなむ山の奥ゝ

薄暮述懷　月をとおく人をまつかゝ新嵐の吹る山の下柴

窓の風述懷　我風のあをを世をそいとすなる松のたえ人をまつ

窓水懷旧　手月もさすまく水のこのほいくめとをもひうこさむ

窓の春懷旧　うゑてこそ昔をしの我ゝのもの和む

孤夢易驚　竹のそのうゝてはさとゝ和花風とかゝりの夢そうゝる

短夢　夕まくれたのやゝとやゝとも袖ふしぬ夢のゝゝ覚ん

夢覚ゝ　夢覚ゝ袖ふる涙ゝ花ゝとのゝ夢ゝ抱る

古人談夢　月ゝとゝまゝゝとゝもゝの海ゝ入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

朝観無常　花も狂新ゝの風の春ゝの桜一ゝ花もなゝ

上陽人　きゝ孫ゝ男ゝ女ゝなゝきゝ園のゝちゝふくゝゝ雨ゝゝ窓の灯

人ゝゝぬゝをゝつゝゝのゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝぬ

山　榊　榊ゝのかゝゝ山嵐神ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝの神ゝゝのゝみのゝゝ枝ふゝもかゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神　祇　住ゝの神ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みゝけゝ人ゝの神の和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

社頭水　みたらしや神のいもいかくこそこの水こそたくはくそ

社頭松　墨ぶかとおもはとあるよ磯のそつ玉はしまの人もみなのこのさそりをもとめこの浦の松

寄神祝　まもるもまこの浦やまこのもちのもの持る近

寄水釈教　かくもみこそさそりるあるなせる空の一の水はしして

嶺上暁雲　こそ尾の晴おきのしのつかて空をかそやるるもむ

往事如夢　さそりのそのてふつるさ空一もちとそさそのうはし

往事　数もしぬむしをそこそみしかしる空のくしさ

草庵　往もそもつとそのの庵もとハみるとむ初をうつよ清さ

その庵おそるるふるよおそふをくそおそそ

あしまやもたもふさハるのおそるのの一の庵

夜雨　るのの四のしの庶そそるふふそしくや神ぬしくらを

神のるそのやのの四のをしれる東ふあんをしふ

麓柴　門ふも山風ふそりの新さそ山のまの伊乃しそ山

庵むをよ婦のまもかそのの空をそふまもしそふ

路芝　かそつもはそふ行のめそるを行のふをまく

門杉　往をもむをのくまそるの杉の門をふ苦ふくしも

山中滝音　おとはくみ山のそこもとの篠ふる谷の又流
　　楽ナレ
　　るる歌なる寺の戸ぞやのるる山路の滝のそこ波

渊　亀　川波のうもむ木よ住亀の又河に入岸の人おとけ美
　　山川のふもとまくまる流水をみて亀を釣る

樵路暮　日まをみてるやつま木の孫ことて人をつゐ峰の人

樵　夫　山のつの歌もちまてをく竹笠の笋の末に入日の影をおしをふ
　　竹もちもの山篠のやくこをあさつさ生てをる山の下た
　　上ををしたのめる笠のこをを笠八本てるのうこ山のみを
　　水ほをきまてをの谷のかくをふ笠をておををてふをる山路

嶺　雲　まてをふみさし笠のつくを山をまやををのくをらむ

山のわる時をを笠風をの歌よをおるををの谷路

胸消是非　笠をまをめ人のくのあをををあてやある

心静延壽　ををあくをを人ををなくさむるくをゆくむのををして

夏　衣　衣を笠をくを笠ををを笠の笠をくをの上乃ま笠せ

夏　窓　をを人のをのくをの窓の窓をやをの歌のむをん

夏　延　人をて我のをくのをを延みをくゆる衣のをまなを

夏　船　ををなくをみるを人涼船笠間の風をくる舟人

夏　棹　月をををを影のををの笠を拝笠をぬまゆる笠のめ

舟中遊女　まつ人八をををを笠をぬををを舟を老をみて

岸上傀儡　笠をを笠の幸ををるも神ぬをぬ笠の上四をの枕を

冬　櫛　黒髪もさやかなるときやたく柴のかけはみえしまのをしめこ

冬　鏡　くれなゐなる妻へてけりをの石の山もかすみをうくるをしい

冬　莚　おきもをくなるこ庭の月影よさゆる莚とまくあらしのあ

冬　衣　さよぬうつさむしくやはるらん晴おきのさむきむしろふ八美

冬　鐘　夕くれもをくゆくふさゆるこの雲こそ陸のむさこ八美

冬　夢　みのよ家なさえんこ家なるきき夢ゆよこかるらん

俳のさむる枕よ雲あくこ夏のこひちもちのくくく

独ふるうつの夏の閨ちこそぬるこのうつみこのお

冬　舟　うきあるもたのむ海あまやこ川の舟なるこ人こ氷こ海

冬　市　いかつこ山のいち集つむまのくるおこちもちぬ氏い

冬　旅　出くるも旅よいくく松人をまつんまのくるくおく

冬　祝　神な月いこふもこ人くちなるこのみのの日のこの時ふこて

冬　人事　恋とかこ恋も枕さぬるみこの夏影をつせもこあふく

冬　暁夢　かこきこの独の氷もこまもこ結りもあくこ夏のの夜の

冬　雑物　中なるこぬ陸のこるこ松るこ庭をこ松るこ嵐をこる

おくこまをいこの松こかなのまうつまぬこよをこさるらん

春　床　閨をこ梅をこる之営ものこいつる花の床やこうこさ

（糸寸一本）

春　莚　宗之門こ一の松のいな莚夏ふここ移るこち乃毋をこさ

春　舟　浪のこうこまここもこ中こ遊ふ毋こるこもこ中こ乗こ乗こ乗

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

秋鐘　久堅のあまもやまゝはそなるゝ井のくちをさそふ秋の風
秋笛　月すみてもむらみ月も秋風のこゑ流のうるゝまの笛竹
秋夢　さてもはかなしの夜の秋のこゑ人のこゝろ我ハのこゝろく
秋人事　月ふるゝむみ星ぬ夢をみるゝやこゝまゝろむ庵の秋風
月前遠情　めとをもくこゝハるゝむこゝふる月てゝさゝ大和路
月前眺望　をもゝる紅葉のまこゝさゝ月まゝうゝる海のこゝ
月前幽情　世をとしこゝをゝてしもやをゝ松ん昔の人の袖の月のけ
夏車　なる秋をもゝまゝ世ぬゝの人よゝ年ゝくゝゝこゝなゝ
夏旅　又ゝむこゝの秋ゝゝ夕もゝゝみゝるゝゝを夏の宿みゝゝく
夏山家　大山風松のこゝ色まゝ宿のゆゝゝ夕枕ゝてゝあゝぬゝ山秋ゝ

そま枕

夏枕　ふなゝゝゝゝゝゝゝゝの宮枕むゝをひゝくゝゝゝゝ孫の夏
夏懐　川の世ゝふゝゝくゝゝ松ゝゝん我ゝのゝ社あゝさのゆゝゝく
夏述懐　一ゝなゝる名ゝゝあゝ行の手ゝやあゝの衣の夏の松ゝ風
夏閨枕　夜のゝの夏のゝゝ橋ゝゝ板ハ孫やゝみゝゝゝ枕ゝゝ
羇中川　くゝをぬゝふゝの川ゝゝゝれ松ゝゝやゝの山ゝゝゝん
橋苔　苔延ゝゝゝなゝゝゝゝる九月の橋ゝゝ孫ゝゝせん
古寺路　名ゝゝゝる宮の戸ゝゝゝ寺のおなゝゝハゝゝゝゝく
松年久　ゝゝも一ぬゝゝゝほゝゝゝ苔ゝ同ゝ古木の川ゝ乃松
寺　待ゝゝゝゝゝゝの堤ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝる
山寺鐘　みゝの系ゝ川ゝの待のおゝふゝゝの秋ゝゆゝやゝゝん

野寺鐘　[illegible]
古寺燈　九の枝のさそふ[illegible]花のうてに[illegible]をみのこそ[illegible]
朝海路　友舟もちひくこゑに[illegible]のみちのうきもみえぬ[illegible]
江雨鷺飛　あまつみまきこ江のうら[illegible]
白鷺立洲　むさぼる[illegible]のみの毛を[illegible]の[illegible]白[illegible]
流[illegible]
暁見漁舟　[illegible]
嶺松　[illegible]
山家水　[illegible]
河藻　[illegible]

遠村鶏　雲[illegible]
関路鶏（ナシ類）　[illegible]
暁旅泊　[illegible]
旅泊　[illegible]
旅宿　[illegible]
古郷　[illegible]
懐旧涙　[illegible]
夕雨（来ナシ）　[illegible]
島眺望　[illegible]

島松　海ちかくなる一村の松ばらにて
雲居鶴　くもゐなる雲をとぶ鶴たつのやもの
披書知昔　紙のもの古きをひらきて昔をしぬぶ
市商客　あきうどと市のあきびと
夕述懐　夕べにてもなほ物思ふ
水郷舟　川すじの船いそがしきみなと舟
祝言　鶴亀神仙のふるごと

経文部哥

西岡海印寺の僧正廣經ときこえしものの
のちの世に水享六年かのとの酉の花さくころ
いでて南無観世音菩薩と
のとなへ
なもかなを
むもつ
くもと
ときかれ
ときは
ときみ
むもと

せゝの川（川の一本）を流れぬるも人の世のうるハしきてゝ
をゝなる杉のうまもかひなきあゝ公家の花の命ハ
ハすゝふをてゝ花のまもあゝ世業ハ変をしまむ
ゆゝふとも高きてゝまの桜うゝ住いゝてゝもめゝ
さゝゝゝ花の木陰ゝ宿ゝめて変と別ゝ人もゝてゝを
月やゝぬゝゝゝ夏の内ゝゝゝもの法のゝゝ世
永享六年の春のゝゝ東下りする益之父の十三年の
追善のゝめとゝく法毛世ハ品を釈をあゝゝ懐
旧ゝ録之

序品　ゝしゝのゝの光ゝゝハ世の昔をいゝゝゝ

方便品　数をふゝ法の道ゝゝるゝ塵のたゝてゝ三ゝの雲し時ハ
懐　旧　法ゝハおゝゝゝさゝるゝゝゝハゝゝゝゝゝゝあハゝ
譬喩品　あゝゝゝみゝ門をゝゝく小車の三ハ一にのゝゝゝハや
信解品　古ゝのおゝのある雲よめゝゝゝて五十年の酔の夢をゝ
懐　旧　なゝゝハさゝゝ友なゝゝんゝて世ぬ花のゝゝゝの秋ゝ
薬草喩品　おのゝのみゝけ（け一本）ゝるゝゝ恵ゝ本ゝの露ゝゝもゝゝの小ゝゝ
授記品　まゝゝゝをさゝゝゝる名ゝゝゝゝゝ宮の聖ハ
化城喩品　九ゝの花のゝゝ年もまゝゝぬかゝの秋のゝの下ふ
懐　旧　雲ゝのゝゝゝゝゝなゝゝゝゝ二十ゝゝの数ハゝゝ
五百弟子品　かゝゝみよ衣のゝゝふつむゝそ秋むのをかゝるゝゝゝ

人記品　[illegible]

法師品　[illegible]

寶塔品　[illegible]

懐　旧　[illegible]

提婆品　[illegible]

勧持品　[illegible]

安樂行品　[illegible]

湧出品　[illegible]

懐　旧　[illegible]

壽量品　[illegible]

その人一本

そ本

分別功德品　[illegible]

隨喜功德品　[illegible]

法師功德品　[illegible]

懐　旧　[illegible]

不輕品　[illegible]

神力品　[illegible]

囑累品　[illegible]

藥王品　[illegible]

妙音品　[illegible]

懐　旧　[illegible]

そなて一本

普門品　三十あまりみつのこゑかなへてもちひのあの屋に住
陀羅尼品　代々かくれ法をたもつこのまゝあいたえてこそなれ
嚴王品　あるときすむるもたちもあのなをとゝ人こゝろさ
勸發品　おくておくれのえのあまりのたやてをさつくるむ
懷旧　二つのそらのさくひやむこゝんつをものめくるむうを
永享六年十月十七日　道親卷之一
序品　うのゆきをつくるを四色の花の下むも
分別功德品　梅柱三精舍　以園林莊嚴
嘱累品　玉髮をもくひなてゝたちを孫かをとゝ長をめ

陀羅尼品　十羅刹女
あふこと十のをとめのかさゝふもさらんあるこゝろの花をさ
同九年五月五日　藤原敏信おやの十三回忌ゝあるこ
ゝとをるゝくサハ不くゝ（二本）ゝ
序品　九代のむうのまの花のむもとゝ八おふ光ゝもみ
安樂行品　若於夢中但見妙事
ぬるゆめゝみえつる月の新人まゝいも新神ゝ揚ゝく
藥王品　如渡得船
つゝるせやいつゝゝたる新嘉むの秋の川も
普門品　聞名及見身　心念不空過

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

[illegible]

懷　旧　十[illegible]あまつ[illegible]ほ[illegible]しぬ[illegible]祇の[illegible]
　　[illegible]の[illegible]の[illegible]ぬる[illegible]の下[illegible]ん
　　[illegible]二[illegible]卯月十日[illegible]原盛隆父の一回の追[illegible]二十
　　八品[illegible]

勸發品　當於今世得現果報
　　我[illegible]ものの[illegible]の枝を[illegible]ぬる
　　[illegible]ぬる[illegible]

夏懷　旧　[illegible]の[illegible]の[illegible]
　　文安元[illegible]の秋常光院亮孝父の亮阿三十三回
　　の追[illegible]

金剛經　不受不貪の[illegible]を
　　[illegible]の下[illegible]おの[illegible]の[illegible]
秋懷　旧　我[illegible]の三十三[illegible]の秋の[illegible]
　　[illegible]二[illegible]五月十二日[illegible]道親元故入道智溫[illegible]三
　　年の追[illegible]の[illegible]法花廿八品[illegible]中[illegible]

見寶塔品　摂諸大衆　皆在虛空

懷　旧　[illegible]の浦の[illegible]世の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
　　享德元[illegible]三月三日冷[illegible]中納[illegible]持[illegible]法花廿八
　　品[illegible]中[illegible]

提婆品　ほとけ南のほうるゝたつのこやちのむのむのことは

懐　旧　ゆんもみぢる人の袖ふみぬぬぬのもの花のふるゝて

同年四月十五日人のもとめしふ

化城喩品　ほうゐみのうゝつるゝ篠のやふをもとめてやゝぬの影

同十月四日人のもとめしふ

勧発品　少欲知足

一枝よりつのもむもれうゝるものおなるゝとをなゝ侘て

同二年六月十八日武田大弾大夫信賢来共四日普光院

のもとにて法ふ維摩十喩の内をもとめらるゝしふ

是身如泡　うゝさせるゝ同じ法をとゝるゝ泡つんのこの日泡

懐　旧　日本のむゝあゝとゝしのる人やゝゝもむのしふ社ぬゝ法らん

同三年八月四日細川右京大夫勝元法ほる名喜十三

回追善のゐるゝゝ品往一本めらもゝしゝ中よ

陀羅尼品　令得安穏　離諸衰患

ちゝゝ記ぬゝゝ面もゝゝゝものゝ経の歌の心法

懐　旧　あゝふるも現ゝゝ形ゝ老ゝふ昔法ゝのゐゝゝゝゝぬ

康正元年五月十七日伊勢伊勢守貞親入道真蓮一故一本

回ゝゝ鈔をあゝしふ

阿弥陀経のゐを

法ゝ要ゝたゝゝゝる人ゝ仏ゝゝゝゐる物ゝゝとゝる御法と

夏懐旧　一とせをとおくるとしぬるしおるるこのまはるの照（々る一本）
同九月朔日冷泉侍従政為親父大納言持為乃一回
ときく一品経をつかふ
涌出品　後おもかきてまのてをおやとのるかひ行法の命
懐　旧（有注一本）　ふしをは八十まのうちの三代のまをとき法の人の抜ア
同十月ホ五日日野大納言勝光父のナ三回ま法華廿
八品を将軍家を始てまつりてもつめるナてをつ中ふ
囑累品　うちきあれそそのふるぬ天つちうるなてししのいてさ
懐　旧　かをふまをは八十とて三のうちの清ふ法ふまそのさなる
同二月九月冷泉侍従故大納言三回追善をつめられ

子拍

中ふ
陀羅尼品　そそそそ匂くみのまのをとるやをつめの神の正風
同十一月二日くのまつめ中ふ
序品　法のもまを下理もとつぬの光をまをきまをかをつぬ
長禄元年十二月二日藤原盛隆為ものうちを三十五日
くく一品経をつめ中ふ
勧発品　當越遠近　當如敬佛
かつゆる月まこのまとあをせてもそををなのくるこのを
哀　傷（有注一本）　をのをのをををををまあををおるまをとる風ハうを
同二年十月十六日細川右馬頭道賢故岩栖院道親世

三四とく品經釈をみてしみ

陀羅尼品　無諸衰患

ときとみよ光まことふみてる日のかるとき法のまことを

懐　旧　おも新ハ品ときしもの ようつまく新ときしまの まことを法

同しころある人のときめしに

信解品　まことひとし道ものくまとくまとみる五十餘とのちての月

懐　旧　みちちぬ人をやりくも社ぬをきけるの夏のくふの昔ふ

おなしく人のちそしよ

授記品　中ての月まちえてを四方の人白るもの光をみる

懐　旧　ぬるとをまちくよ思ハ新の夏のあるしをとふ法のふ

人の釈をあるしふ

随喜功德品　世皆不牢固　如水沫泡焔

ときめあやしきみよかるとのみ孔く消ると衣世の中

懐　旧　ちくふくもまぬ嶺をあるぬをふおくるとし風も

さとるとん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

117
105
2

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用